2022年5月8日・佐土原キリスト教会・礼拝説教
聖書箇所：マルコ福音書6章45〜56節
説教題：恐れることはない

以前、FEBCのラジオ放送で1人の牧師のお証を聞いたことがあります。その先生は、ストレスから鬱になり、自分でも良く分からないうちに、家の二階の窓から外に向かって叫ぶような状態になられた、ということでした。「ストレスは怖い」としみじみ言っておられましたが、その方が「強いられた恵み」ということを何度も語られました。「今まで、出来ることならしたくない経験が何度もあった。しかし、それを通して分かった神の恵みがあった」と言われました。それがその先生が言われる「強いられた恵み」です。私達の信仰生活には、「嫌だな」と思うけれど歩かされる道があります。しかし、そこでしか経験出来ない恵みがあるのだと思います。「詩篇」に「私はあわてて言いました。『私はあなたの目の前から断たれたのだ』と。しかし、あなたは私の願いの声を聞かれました。私があなたに叫び求めたときに」(詩篇31:22)という言葉があります。私も何かがあると不信仰になります。いや「不信仰になる」のではない、本来の不信仰が暴露されます。だからこそ、問題の中でこそ輝かすことの出来るような信仰を持ちたいと願います。その意味でこの個所は、私達の信仰理解に良い示唆(洞察)を与えてくれる個所だと思います。「内容」と「メッセージ」に分けてお話致します。(なお56節まで読みましたが、説教では45〜52節を取り扱いますのでご了解下さい)。

1：内容〜湖上を歩いて来て弟子達を助けた主イエス

この話は「5000人の給食」の続きです。イエス様は、弟子達を「5000人の給食」の現場から「強いて」舟に乗り込ませて、ガリラヤ湖に漕ぎ出させました。そのために、普段は弟子達がやっていたであろう「群衆を解散させる係」を、イエスが引き受けられました。その後、イエス様は、1人で祈るために山に登られました。一方の弟子達は、舟を漕ぎ出してはみたものの、やがて逆風のために漕ぎあぐねるような状態になってしまいました。夕方に岸を出発した舟に、イエス様が近づいて来られたのが「夜中の三時ごろ」(48)ですから、何時間も漕ぎあぐねていたことになります。しかし、そのような中で「夜中の三時ごろ—{『夜が明けるころ』(新共同訳)}」になって、イエス様が水の上を歩いて近づいて来られて、彼らを助けられました。

48節に「イエスは、弟子たちが、向かい風のために漕ぎあぐねているのをご覧になり、夜中の三時ごろ、湖の上を歩いて、彼らに近づいて行かれたが、そのままそばを通り過ぎようとのおつもりであった」(48)とあります。助けるために行かれたのなら、どうして「通り過ぎようとのおつもりであった」のか。「新共同訳」は「ところが、逆風のために弟子たちが漕ぎ悩んでいるのを見て、夜が明けるころ、湖の上を歩いて弟子たちのところに行き、そばを通り過ぎようとされた」(新共同訳48)と訳しています。この両訳にある「通り過ぎようと」という言葉は、「旧約聖書」で神の現れ方を表現する言葉です。つまりイエスが「通り過ぎようとされた」というのは、「神としての現れ方で弟子達の前に現れた」ということを言っているのです。

しかし、そのようにして現れたイエス様を見て、弟子達は驚きました、怯えました。「幽霊だと思い、叫び声をあげた」(49)とあります。その時にイエス様から「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない」(50)という声が掛かります。この「わたしだ」も「わたしがいる(ある)」という神様の自己紹介の言葉です。ここでもイエス様は「神」として出現しておられるのです。そして、イエス様が舟に乗り込まれた時、風が静まり、彼らは助け出されました。これが、この記事の内容です。

「『水の上を歩く』、そんなことがあるのか」と言って「イエスは、きっと浅瀬を歩いておられたのだ」と考えようとする人々がいます。しかし申しあげたように、この個所では、イエス様の神性が強調されています。三浦綾子さんがご自分の求道時代を振り返って「イエスが神の子なら

水の上を歩こうがどうしようが、不思議でも何でもなかった、私にとっての問題は、イエスが神の子なのかどうなのか、ということだった」と言っておられますが、イエス様が神の子なら、水の上も歩かれたでしょう。そして「実は浅瀬を歩いていた。それを『水の上を歩いていた』と書き変えた」等ということなら、「福音書」には残らなかったはずです。「マルコ福音書」が書かれた時代、イエス様のことを伝える人々も、読んでイエス様を信じようとする人々も、言わば命がけです。迫害されることを覚悟してイエス様を伝え、またイエス様を信じて行くのです。作り話や事実を捻じ曲げた話等―(偽物等)―は通用しない。何の力もなかったはずです。真実の物語だからこそ、彼らは伝え、人々は信じて行ったのです。だから大切なことは「これが事実かどうか」ではない。マルコがこの出来事からどのようなメッセージを受け取ったのか、ということです。では、この記事は、どのようなメッセージを語るのか。2 つのことを教えられるように思います。

**2：メッセージ**

**1）イエスの助けに信頼する**

この個所が私達に語る一番のメッセージは「主は、私達の人生の逆風を知っておられ、その中に来て下さる。だから、その主に信頼して歩きなさい」ということだろうと思います。

私達には、色々な逆風があります。4 章で語られていた「突風」のような―(思いがけなくやって来る)―逆風もあるでしょう。ここでは、弟子達は、「嵐」とまでは言えないような逆風の中で長時間悩まされました。長く背負って行かなければならない重荷のような逆風もあるでしょう。4 章の「突風」の時には、イエス様は舟の艫の方で寝ておられました。彼らは「イエス様はこの大変な状況を知らないのでないか、何もしてくれないのではないか、私達は滅びるのではないか」と思って「先生。私たちがおぼれて死にそうでも、何とも思われないのですか」(マルコ 4:35)と叫びました。ここでは舟そのものに乗っておられませんでした。山の上で祈っておられました。イエス様は、祈りの中で彼らを覚えておられたでしょうし、実際、湖の上で逆風に行き悩んでいる弟子達を山の上から見ておられたでしょう。しかし、弟子達はそれを知らないからパニックに陥っていたと思うのです。彼らは困難の中でイエス様を見失っていたのです。イエス様に信頼して、イエス様に助けを求めていたのではないと思います。助けを求めていたのなら、イエス様が来られるのを見た時、もう少し違う反応があったはずです。でも彼らは見失っていた。だからこそ、イエス様の出現を恐れたのです。私達もそうではありませんか。順調に行っている時には信仰深い感じがします。「共にいて下さる神」を信じているつもりでいます。しかし、一旦何かあると―(先ほども申し上げたように)―神を見失ってしまう、そのような者ではないでしょうか。しかし、彼らは分かっていなかったけれど、イエス様は彼らの窮状を知っておられたのです。「夜明け前」、それは「夜が一番暗くなる時だ」と聞いたことがあります。知っておられたから、その一番暗い時に、イエス様は、弟子達の思いもしない方法でやって来て、彼らに助けを与えられたのです。

私はここを黙想していて、どうしても自分がカナダで入院した時のことを思ってしまいます。私も神を見失っていました。病院で働くソーシャルワーカーから「あなたは牧師でしょう、信仰はどうしたの」と言われました。牧師としては、本当に恥ずかしいことでした。しかし、そう言われてもどうしようもなかったのです。「なぜ元気になれたのか」、はっきりとは説明出来ないのです。状況が変わったわけではありません。薬も効いて来たのでしょうが、でも理由らしい理由と言えば、心に与えられた 1 つの印象でした。「今までも綱渡りのような歩みだったけど、その都度、神様に助けられて来たな」とぼんやりと思いました。そうしたら突然、「だったら、ベッドに潜り込んでいる今も、私は神様の御手の中にいるのではないだろうか。神様の御手の中にいるのなら、神が何かして下さるのではないか」、心がそう導かれたのです。イエスが来て下さった瞬間でした。そして私は救い出されました。有名なアウグスチヌスは言いました。「イエスが波を踏み

つけて来られたように、イエスは人生に湧き上がって来る全ての混乱を足の下に踏みつけられる。キリスト者よ、どうして恐れるのか」(アウグスチヌス)。「ヘブル書」は言います。「主ご自身がこう言われるのです。『わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない』。そこで、私たちは確信に満ちてこう言います。『主は私の助け手です。私は恐れません』」(ヘブル 13:5～6)。

初代教会のクリスチャン達も、逆風の中で立ち止まるしかないような状況に何度も襲われたと思うのです。その時に、この物語は、彼らを励ましたと思います。そしてこの個所は、私達をも「問題の中で神様に信頼するように、神が助けて下さることに信頼して生きるように」と励ますのです。「しっかりしなさい。わたしがいる。恐れるな」。イエス様の声を心に反芻しながら、信仰生活を送りたいと願うことです。

**2）神の配慮に信頼する**

イエス様は、なぜ弟子達を無理やりというか、「強いて」、急がすように、舟に乗せて湖に送り出されたのでしょうか。弟子達を群衆から引き離そうとされたということもあると思います。並行箇所の「ヨハネ福音書 6 章」に「イエスは、人々が自分を王とするために、むりやりに連れて行こうとしているのを知って、ただひとり…山に退かれた」(ヨハネ 6:15)とあります。ユダヤの人々は、ローマを倒してくれるリーダー、その後ユダヤ人の王になってくれる人、そんな指導者を切望していました。「5000 人の給食」という奇跡を経験した人々は、イエスの中にそれを見ました。その群衆の様子を見て、弟子達はそれを喜び、「イエス様が権力者になれば、自分達もそれなりの立場に立てる」という思いが湧いたのではないでしょうか。だから彼らは、おそらく群衆と一緒にいる雰囲気が心地よかったのです。

しかしイエス様は、権力者になるためではない、十字架に架かって人々の罪の罰を代わりに受け、人々を神に結びつけ、天国に迎え入れるために地上に来られたのです。そして弟子達は、イエス様の十字架と復活の後、イエス様の十字架と復活を宣べ伝え、人々を天の御国に導くことを期待されていたのです。地上の権力や名声を求めることを期待されていたのではありません。使徒パウロは「私たちの国籍は天にあります」(ピリピ 3:20)と言いましたが、彼らは天の御国を目指さなければならなかったのです。そのために、彼らを強いて湖に送り出されたのだと思います。

しかし、それ以上の意味があったと思います。それを考えるヒントは、「彼らは…パンのことから悟るところがなく、その心は堅く閉じていたからである」(52)という言葉です。彼らは、信仰を取り扱われる必要があったのです。彼らは、イエス様に強いられて湖に漕ぎ出したばかりに、風に悩まされることになります。しかし、その悩みの中で貴重な信仰体験をするのです。確かに弟子達は風に悩んだ。しかし、そこに「イエス体験」が備えられていたのです。その体験は、彼らの生涯の信仰を支えて行くのです。

私達は、時に「出来ればしたくない経験」をするかも知れません。状況が意に沿わない、自分の願いに沿わない方向に導かれることがあります。その中で私達は呻きます。しかしその時、実はその状況を用いて、神様が私達の信仰―(信仰生活)―の軌道修正をされている時なのではないでしょうか。「あなたを祝福に導くのはその生き方ではない。この生き方なのだ、あなたを祝福に導くのはその信仰ではない、この信仰だ」と、私達に関わって下さっている時なのではないでしょうか。それだけではなく、そこで私達は貴重な―(生涯を支えるような)―神体験をさせてもらうのではないでしょうか。申し上げたように、鬱で入院したことは、私には本当に辛い時でした。絶望というものを味わいました。しかし今、私の信仰は、あの時の神体験に支えられているのです。

今年も 3 月 11 日には、テレビでも震災の様々な番組が放送されていました。もちろん私達は、神が震災を起こされたとは決して思いません。悪の力が働いたと、私は思います。しかし、神が全世界の支配者であられるなら、どうして震災が起こることを許されたのか、誰にも答えられな

い問いです。ですからここで引用するのが相応しいかどうか分かりませんが、先週もご紹介した—(この教会にも来て下さった)—福島の佐藤彰先生お証しに良い示唆を頂けます。先生は「震災を通して変えられた」と言われました。「今までの自分達は、信仰生活と言っても、物を求め、人と比べてキョロキョロと周りを見回す、そういう生き方をして来たのではないか。幸せのハードルを上げて、少々のことには満足しない生き方をして来たのではないか。本当に大事なことを、大事な人を、大事にして来たのか」、それを深く思されたと言われました。またこうも言われました。「見えるものが一瞬にして消えてしまうのを見て、『こんなものは—(見えるものは)—頼りにならない』ということも本当に分かった」。試練の中の神体験が先生方の信仰をさらに深め、そしてここまで来て、震災を経験していない私達の信仰を励まして下さったのです。ある講演会では、こうも言われました。「これまでもそうだったように、この辛い経験も、いつか『あぁ。恵みだった』と感じさせて下さるに違いないと信じることが出来ます」。先生の神体験が言わせている言葉ではないでしょうか。「神の配慮を信じたい、信じられる」、そういうことだと思いました。あるご高齢の先生が「信仰は、最後は体験です」と言われました。その意味でも、神体験—(神に取り扱われる体験)—をすることは大切なことではないでしょうか。

私達は、出来ればしたくない経験をさせられることがあります。それが、偶然のことであれば、私達には、そのことを通って行く希望が見えません。しかし私達は、どんなに嬉しくない経験であっても、それが最終的には、御手の中で起こっていること、そこにも神の深いお考えがあることを信じるのです。その時、希望が湧いて来ます。そしてその嬉しくない経験は、きっと「強いられた恵み」へと変わるに違いありません。どんな時にも神の御手があること、私達を包んでいることを信じて—(ここでも申し上げたいことは)—「しっかりしなさい、わたしがいる、恐れるな」というイエス様の声を心に響かせて歩いて行きたいということです。

**3：最後に**

今日、2 つのメッセージを申し上げました。「神の助けに信頼する」、「神の配慮に信頼する」。三浦綾子さんが言っていました。「人生には、『もうこれで終わりだ』ということはない」。神がおられるからです。神体験が言わせた言葉です。主は言われました。「しっかりしなさい、わたしがいる、恐れるな」、この言葉を支えに、色々なことのあるこの信仰の生涯を、前に向かって歩いて参りましょう。